

思ひ草

第43号

令和6(2024)年1月29日 発行

生涯探究社会の到来

初等教育学科教授 たむら まなぶ 田村 学



新型コロナウイルス感染症の拡大は、わたしたちの社会活動を停止させ、大切な命を失う状況を生みました。先の見えない閉塞感の中、日本全国にある学びの場は丁寧で慎重な対応を繰り返し、一人一人の幼児、児童、生徒、学生の安全と安心を確保してきました。コロナ禍において、社会の安定に対して学校や大学が果たしてきた役割が極めて大きかったことは、誰もが認めるところでしょう。

ようやく社会状況が回復し始め、大学での活動も対面での講義や積極的なコミュニケーションを位置付けたアクティブなものに変わってきています。たまプラーザキャンパスにも、にこやかな笑顔と元気な声が溢れるようになってきました。

一方で、コロナ禍の経験は、社会に新しい価値を求めているように感じます。それは、持続可能性や倫理性、多様性かもしれません。さらに言えば、生成系AIの存在が、社会だけではなく教育の有り様をも大きく変えようとしています。学ぶことの意味は新しく問い直され、探究すること

の必要性がますます高まるでしょう。体験による身体性の価値が改めてクローズアップされるものと思われます。これからの社会は、生涯にわたって学習し続ける社会から、生涯にわたって探究し続ける「生涯探究社会」へと変容するものと考えられます。

こうした中、学校や大学の社会資本としての価値は見直されることとなるでしょう。また、カリキュラムにおける探究や身体的重要性は今まで以上に大きなものとなりそうです。そこでは、若い世代の柔軟な思考力やアクティブな行動力、豊かなコミュニケーション能力が欠かせないものとなってきます。若いエネルギーを存分に発揮することを通して、様々な人と関わること、多様な情報を豊富に収集すること、粘り強く問い続けること、自らの考えを外部に発信し行動することなどを期待したいと思います。

國學院大學人間開発学部の教育活動が、今迄以上に充実し、発展することを強く願っています。

箱根駅伝優勝校の取り組みから学ぶ

健康体育学科教授 やまだ よしひろ 山田 佳弘



今年の第100回箱根駅伝は、記念大会として全国の大学に出場機会が与えられ、昨年秋の予選会から注目を集めていた。優勝筆頭は2年連続“駅伝3冠”を期待されている駒澤大学。対抗馬には中央大学、青山学院大学、そして國學院大學がニュースで取り上げられていた。結果は往路3区から首位を独走した青山学院大学の総合優勝。この青学駅伝部の強さの秘密取材したスポーツジャーナリスト・生島淳氏によると、寮の壁に張り出されている選手たちの月間目標に注目したとのことだった。ただし、掲示前には少人数でのミーティングで共有され、目標の妥当性、そしてレビューが行われるとのこと。選手間で話し合いの機会を持つことがモチベーションを高く保つ秘訣に繋がっているとのことである。

次年度も本学部において教育実習をはじめ、教育インターンシップ、教育ボランティア、介護等体験、さらには教員採用試験と学生にとって大きなイベントが待ち構えている。どんな環境で実習するのか、どんな準備が必要なの

か、その準備は足りているのか、いろいろな不安が頭をよぎることだろう。これを一人で考え込んでも仕方がない。学部の仲間と話してみても見えてくるのではないだろうか。もしかしたら自身の準備の甘さも感じるかもしれない。でも、軌道修正できる機会と思えばいい。やはり、青学駅伝部と一緒に教員を目指す仲間との話し合いが、そのモチベーションも高く保てるのではないだろうか。彼らと同じように月間目標設定とその妥当性を仲間とのミーティングで検討してみてもどうだろうか。予定は狂うものである。現状を見直し、先を見通して、毎月末に翌月の月間目標を設定して、それを仲間にも聞いてもらう。これが自身と仲間への決意表明にも繋がるはずだ。

今年の箱根駅伝で出場できたのは23校230人のみ。この大会を目指してトレーニングをコツコツと積み重ねてきた彼らの成果である。教職課程の学生も教員採用試験合格までを一人でタスキを繋いでいく駅伝競走選手である。みんな、大手町のゴール目指して走り切れ！

教育実習

人に教える面白さや魅力に気が付く経験を

健康体育学科准教授 みた さおり
三田 沙織



文部科学省が示している教育実習の目標には、教育実践の基礎的な態度や能力を身に付けることや教員としての適性を確認する機会とすることなどが掲げられています。

先生になりたいと考える学生は、勉強や運動が得意な人が多いでしょう。反対に勉強や運動に苦手意識を持っている学生は、教員になりたいという気持ちはあるけれど、指導することに不安を抱えている人が多いかもしれません。このような学生の皆さん自身の得手不得手は、教員としての資質能力に関わると考えられますが、教育学という学問を勉強すると、さほど影響がないことがわかるようになります。例えば、スポーツの世界では、選手として優秀な人が優秀な指導者になるとは限りません。つまり、自分が得意なことや教えたいことをただ教えるだけではうまくいかなかったことがあります。そこには、対象となる「子ども」の存在があるからです。教師が教えたいことを確実に子どもたちが身に付けられるようにするためには、どうすればいいのか。それらを丁寧に考え続けることができるかどうか教員としての資質に関わり、能力の高さに影響するように思えます。

大学の講義では、専門知識の修得つまり理論の学修が中心となり、当然子どもたちを大学に招くことは叶いません。そこで教育実習の機会を存分に活用してきてほしいと思います。幸いなことに日頃から教育実践の場で子どもたちの姿を傍でよく見ておられる先生方が皆さんを指導して下さい。ぜひ大学で学んだ理論(指導方法含む)を実践して、どうしたら教えたいことが伝わり、能力として身に付きやすくなるのか、積極的に学修をしてきてほしいと思います。理論は理論のままで終わる場合もあれば、理論を越える瞬間もあります。それらが人に関わり人を育てる教育の魅力だと感じています。

教育実習の経験が、人に教える面白さや魅力に気が付き、教師になりたいという動機をさらに高めるきっかけになってくれることを願っています。

教育実習で感じた教師としてのやりがい

健康体育学科 3年 こたに めぐみ
小谷 恵美

私は三週間教育実習を行い、中学三年生の体育と高校二年生の保健を担当しました。教育実習の日々を振り返ると、悩む時間もありました。しかし、先生方、生徒、他の教育実習生の支えによって充実した時間を過ごすことができました。

実習中、特に大変だったことは授業準備です。生徒に何を伝えればいいのか、また生徒が楽しみつつ、技術や知識を得るにはどのような授業内容にすればいいのか、を特に考えて準備を行いました。保健では十人十色の考え方がある「結婚」についての授業を行いました。その授業展開の中で「前提条件に全員が含まれていなかった」という反省がありました。結婚したい人、したくない人、全員の意見を考えた授業を展開することが出来なかったと感じたことが理由です。

一方で、私がやりがいを感じた瞬間は体育の研究授業です。研究授業はより深く授業構想をし、担当の先生との話し合いを重ねて作り上げた授業でした。研究授業が始まる時、緊張した面持ちの生徒に対峙し、自分がよりしっかりとしようと背筋を伸ばすことが出来ました。授業が終わり、挨拶をし、頭を挙げたと同時に生徒に安堵の表情と声が口々に漏れた瞬間、生徒と授業を作り上げることが出来たと感じました。準備の時間が報われたと感じ、達成感とやりがいがありました。

普段の授業の場所より遠い体育館で行ったため、授業に間に合うように急いで着替え、走って体育館に来てくれたことや、うまく授業が進むように集中して話を聞いてくれた生徒には感謝の気持ちでいっぱいです。担当クラスとの団結がなければ、あのやり切った感覚は生まれなかったと感じます。

今回の教育実習は、生徒や先生方とのコミュニケーションをよくとることやしっかりと準備をすることで乗り越えることができました。この経験は今後みんなと一つのことを成し遂げるときに必ず活きると思います。学びのある充実した三週間になり、自身の成長に繋がりました。

教師塾

東京教師養成塾を通して得たこと (東京教師養成塾より)

初等教育学科 4年 ^{あびる かほ}阿蒜 佳歩

東京教師養成塾には、色々な大学から同じ目標をもった志の高い学生が集まるため、自分では思いつかなかった考え方やものの見方に触れることができ、自分の考え方が広がりました。また、同じ目標をもって取り組んでいる仲間、授業実践や児童との関わりなどで悩んでいることを相談することで、改善策が見つかり、次はこうしてみよう、頑張ろうという気持ちになりました。同じ立場の仲間からの言葉や励まし、仲間の頑張っている姿はとても力になると感じました。

養成塾生だけでなく、指定校の先生方からは、今までの経験を踏まえた具体的な実践的なアドバイスを得ることができ、活動や発問、指示などの選択肢が増えて、授業を考えることがどんどん楽しくなりました。

東京教師養成塾に入ったことで、大学だけでは出会うことができなかった仲間や信頼でき憧れられる先生方と出会い、自分になりたい教師像を具体的にもてたり、授業をする楽しさと難しさを学んだり、教師のやりがいを実感することができました。

アイ・カレッジで得た多くの学び (よこはま教師塾アイ・カレッジより)

初等教育学科 4年 ^{なりた かすみ}成田 花澄

私は、大学3年生の10月から半年間、「よこはま教師塾アイ・カレッジ」に参加しました。授業づくりの講義や演習の他にも、市内の施設での学びや引率訓練なども行い、教師になるために大切なことを学びました。講座では、塾生同士で対話する活動が多く、内容についてより深く理解することができ、学び合う中で多くの刺激を受けました。当初は不明確であった目指す教師像や、自分自身の課題についてもアイ・カレッジの学びを通して、より明確なものにすることができました。

また、同じ目標や夢をもつ仲間や尊敬できる教官と出会い、人とのつながりで得られることが多くありました。仲間と切磋琢磨しながら模擬授業に向けた学習指導案の検討をしたり、教官から今後に向けてのアドバイスをいただいたり、講座毎に新たな気づきを得られ、次に活かすことができました。

アイ・カレッジで仲間と学び合った日々を心に留め、今後も学び続ける姿勢を大切に、4月から教師として全力で子どもたちと向き合っていきたいです。

彩の国かがやき教師塾での出会いと学び (彩の国かがやき教師塾マスターコースより)

健康体育学科 4年 ^{ふじしま たくむ}藤島 拓夢

昨年から新設された中学校コースに参加させていただきました。1月から開講し、主に月1回の全体研修会、週に1回の学校体験実習、社会体験実習、幼稚園での異校種実習などを通して学びました。全体研修会では、充実した研修を豊富に受けることができ、毎回新たな学びを得ることができました。また、同じ志を持つ多くの仲間と、研修会や実習での気づきや疑問、不安や悩みなどを共有する時間もあり、いつもとても楽しみにしていました。教師塾が閉講した今でも多くの仲間と繋がりがあり、宝物となる出会いだと思っています。

学校体験実習では、約1年間、母校の中学校で実習をさせていただきました。4月からはほぼ毎回授業をさせていただき、指導主事から指導をいただく機会も多くあり、様々な単元で授業力を身につけることができました。また、1年間で多くの生徒と関わり、成長を身近に感じ、教師のやりがいを強く感じました。実習校の生徒や先生方との出会いも宝物だと思っています。

彩の国かがやき教師塾での出会いと学びを大切に、今後も努力していきます。

仲間との学び、高め合い (かながわティーチャーズカレッジより)

初等教育学科 4年 ^{たなか とうや}田中 杜弥

私はかながわティーチャーズカレッジのチャレンジコースを受講しました。

ティーチャーズカレッジでは、教育学講座や特別講座といった様々な講座を通して、教師としての使命感や心構え、学級経営や授業づくりについて学ぶことができます。実践力向上講座やスクールライフサポーター活動では、小学校で行事活動に参加したり、学習活動の補助をしたりすることができます。実際の教育現場での教員と児童の関わり合いを実感することで、私にとっての理想の教師像がより具体的になりました。

また、神奈川県教師になりたいという同じ志をもつ仲間とともに高め合っていくことができることも大きな魅力です。講座で模擬授業をする際には、皆でアドバイスを出し合い、切磋琢磨することができました。閉校式後も集まり、教員採用試験に向けて面接練習や模擬授業をし合う等、交流を深めることができました。

ティーチャーズカレッジでの経験を活かし、学び、挑戦し続けるということを大切にしていきたいと思います。

教育ボランティア

教育ボランティアからの学び

初等教育学科 4年 ^{なごや あやか}名古屋 采花

これまで、一般学級や個別支援学級、特別支援教室で授業の補助を行ったり、宿泊体験の引率をしたりなど、様々な形で小学校ボランティアを行ってきました。大学二年生で教育インターンシップに行ってから、継続して教育現場に触れることの必要性に気づき、ボランティアを続けています。様々な発見や経験をする中で、なにより子どもに寄り添い続けることの大切さを学びました。

5年生の宿泊体験学習の引率で山登りに行った際に、怪我をした子と一緒に山の麓で過ごすことができました。最初はつまらなそうな顔をしていましたが、その子の好きなものの話をすると顔が明るくなりました。最後にはキノコなどの面白い植物を探して、山を楽しむことができました。後日、担任の先生から「その日の中で一番思い出に残った」という感想を聞き、その子なりの山の思い出を一緒に作ることができました。この経験から、状況や第一印象で諦めずに、子どもに寄り添い続けることで得られるものがあると、改めて感じることができました。このような経験を忘れずに、4月からの教員生活に活かしたいです。

ボランティアならではの学び

子ども支援学科 4年 ^{くぼ まりえ}久保 真莉恵

私は、大学4年生の4月から世田谷区の幼稚園へ週に一回ボランティアに行っています。基本的には、保育補助や支援が必要な子どもの援助を行っています。

私はボランティアに行く前にも、保育実習、教育実習を通して実際の保育現場を何度も見させていただく機会がありました。しかし、ボランティアは実習と違い、長い期間をかけて子どもたちのことを見ることが出来ます。実習の期間だけでは感じる事が出来なかった子どもたち同士の関係性の変化、成長をボランティアでは近くで感じる事が出来ます。また、先生方の援助の方法は、私自身の保育の幅や新たな考え方を得られる学びとなっています。学びとしてだけではなく、長期間子どもと接する機会を得たことで、「幼稚園の先生になりたい」という自分の意欲をさらに掻き立てられ、大学での学びをより一層精進しようと思えるきっかけにもなりました。

ボランティアを通して、私は自分の中の理想の教師像をより鮮明に考えることが出来るようになりました。これからボランティアで得た経験を職場で活かしていきたいと思っています。

未来塾

開講講座は「2講座」、延べ受講者数は「23名」でした

担当・講座名	開講回数・受講者数 (令和5年12月末日現在)
高山真琴先生の 講座：ピアノ演奏実力アップ講座	4回開講、延べ受講者数4名 令和6年1月以降3回開講予定
小笠原優子先生の 講座：子どもの学びにつながる地域 学習教材調べと教材化	5回開講、延べ受講者数19名 令和6年1月以降3回開講予定